

ブラジル北西部・アフロブラジリアン紀行

ユキーナ・富塚・サントス

1	バイーヤブラック	2
1.1	踊る・移動式カーニバル.....	3
1.2	プライヤ・海岸にて.....	3
1.3	アンチェインドメロディ（ゴーストのテーマ曲）	4
1.4	ブラジル人にとっての楽園とは？.....	5
1.5	夜空を見上げて君を思ふ.....	6
2	ドルチェ・ビーダ（甘い生活）	7
2.1	ペロリーニョにて.....	7
2.2	初めてのお留守番.....	8

ブラジル北西部・アフロブラジリアン紀行

ユキーナ・富塚・サントス

1 バイーヤブラック

サルバドールに行くにはカルナバウ（カーニバル）の前がいいという。

混沌と喧騒がなく、バイーヤのアフリカンの雰囲気余すところなく堪能できるからである。歴史的保存地区のペウロリーニョでは、あちこちで楽器が作られ、力強いドラムがアシェーの旋律を石畳に響かせている。

観光客もそれほど多くはなく、のんびりとしたバイヤーノ達の生活が心の緊張を嫌が応でもほぐしてくれる。

イタリアでも感じたことだが、絶大な権力の支配下に置かれた歴史が長く、階級が根付くと、人々は変化と進歩を望まなくなる。日々同じリズムの生活が何世代にもわたって繰り返されることになる。

バイーヤの州都サルバドールは奴隷貿易発祥の地である。ポルトガル人がこの地を占領した際、砂糖の大規模なプランテーションには多大な労働力を必要とした。西アフリカから大西洋を超えて、たくさんの黒人達が奴隷として連れてこられた。彼らはバイーヤブラックとしてこの地に根付き、今では州の人口の80%以上になっている。

おそらく、アフリカ大陸の中のどこからつれてこられたのかという、オリジン（起源）のちがいが、また、ゲルマン系と混血を進めるか、ラテン系と進めるかという、その後の民族の混じり合いの違い、そして環境への適合の差異がアフリカ系アメリカ人（アメリカでよく見かける黒人）と、ここバイーヤブラックの差を生み出していると思う。

広く張り出した額、眉は濃く、目は往々にして黒目が大きく切れ長である。鼻腔は広く、頬骨が張っており、唇が厚い。これが典型的なバイーヤで見かけるブラックの顔立ちである。オットも例外ではなく、典型的なバイーヤブラックの、あえて言わせていただければ秀逸型である。

ブラジル北西部・アフロブラジリアン紀行

ユキーナ・富塚・サントス

アメリカで見かける黒人は、やはりまなざしと鼻の形に違いが現れるような気がする。これも食べ物と大地の気が大きく影響しているのではと考察しているのだが・・・

1.1 踊る・移動式カーニバル

さて、話をもとにもどして、ここサルバドールに偶然滞在したのはほぼ一年前であった。

カウナバルの前夜祭、もっとも人気の高いブロコ（バンド）のライブに繰り出したときのこだった。

銀縁の眼鏡をかけて、リュックサック、Tシャツ短パンにスニーカーといういでたちは、明らかにこの超クールなライブには場違いで、彼のドレッドヘアですら「おのぼりさん」ぶりをあらわすアクセントにしか働いていなかった。

このちょっと風変わりないでたちが気に入ったのと、眼鏡の奥の瞳が純朴そうだったのと、彼が私に奇妙な薬を飲ませ所持金を持ち去るようなことができるほど、気が利いていそうには、失礼だが、とうてい見えなかったので、私はライブの最中ずっとこのちょっとダサイバイヤーノ青年のもとに身を寄せることにした。

事実、東洋人の女がこんなライブの場にいるとろくでもない男が寄ってきて肝心の音楽自体が何も楽しめない・・・そんな光景はそれまでの数日間で見よっちゅう見ていた。もちろんそれがお目当てで来る日本人が山ほどいるのも知っていたが、それは私の本意ではないので、このちょっとダサイ、ボディガードが傍らにいてくれることは本当にありがたかった。

後から、お互い話あうのは、最初に会ったときはお互いをそれほど好きではなかった・・・ということである。ミゲルは私のことを、スノッブなちょっとお高くとまった、日本人と思っていたし、私も、悪いけど、ちょっとセンスのダサイ、便利な青年、くらいにしか思っていなかった。

彼が、ブラジル人にしては比較的まともな英語を話したことと、カーニバル中のサルバドールを女一人で徘徊する事に身の危険を感じていたので、私は翌日、迷わずこの、ちょっとダサイバイヤーノ君に電話をかけて、ボディガードをお願いした。

1.2 プライヤ・海岸にて

頻繁に外を二人で出歩くようになったのは、それからである。

ブラジル北西部・アフロブラジリアン紀行

ユキーナ・富塚・サントス

彼が格闘家（ファイター）であることも、どうやって英語を勉強したかも、学生であることも、語学学校でバイトをしていることも、ヤキソバをこよなく愛していることも、私は徐々に知っていった。

あるとき、サルバドールの海岸は観光客でごったがえしているのに、車で1時間ほど離れた田舎町に行った。語学学校でミゲルを雇っている先生が、プラヤ（海）に行こうと誘ってくれたからである。

心地よく暑い日差し、規則的に打ち付ける波の音、右側にはいつもミゲルの汗をかいていない褐色のごつい肩が見えた。強い風が吹いてきて、岩場でバランスを崩しそうになると、私の腕をしっかりミゲルが抱いてくれる。

そんな小さなことでも、自分がこれまで求めていたものは、ああこれだったんだなあと思う。こんな身近に求めていたものがある、その幸せを思うと泣けてきた。

サングラスの下に流れている私の涙を見て、ミゲルが訪ねる。「どうして泣くの？」

幸せだから・・・と答える私に、彼はあっさり困惑した表情を浮かべて問いかける。

「僕はずっとここにいるのに、ユキのそばにずっといるよ・・・」

握り返すミゲルの手のひらは温かく、瞬きをするたびに、涙でにじんだマスカラがサングラスの内側についていくのがわかった。

1.3 アンチェインドメロディ（ゴーストのテーマ曲）

二月のブラジル、サルバドールの日差しは強い。何もつけずに太陽の下に居たら、30秒で皮膚が赤く焼けてくるほどである。けれどもそのときの私には、じりじり照りつける太陽がじんわりと心に染み込む暖かさにしか思えなかった。

ミラノの冬は冷たい。硬い石灰質の大地から、深深と凍るような寒さが足元に伝わってくるのである。クリスマスを過ごしたブリュッセルも、ほかのヨーロッパの町並みのように石畳の冷たさが、ひと際、足元に染みわたる。暖を求めて旅したアジアが予想外に寒く、毎日の雨と、人が集まるいたるところの冷房に嫌気が差していたのも事実で

ブラジル北西部・アフロブラジリアン紀行

ユキーナ・富塚・サントス

ある。

ペルー、アルゼンチンと「暖かさ」を求め、人の心に触れたくて旅を続けていたような気がする。さまざまな人と出会い、親子と兄弟、家族の絆にいろいろな場所で触れることができた。そのたびに、自分に本当に必要なものは何かという答えを探していたのだと思った。

そして、その答えが身近にあった。映画「ゴースト」のテーマ曲ではないけれど、I have hungered for your touch...愛する人のぬくもりに飢えていたのだなあと思った。この人のぬくもりは確かで、このぬくもりを感じることができると思うと、自分が生きていることのありがたさがしみじみとわかった。ああ、自分は生きているのだと思った。ほかの何にも代えることのできない尊い事実、私は生きている、それを思うと涙が止まらなかった。

1.4 ブラジル人にとっての楽園とは？

当時の私には、ここブラジルでやらなければいけないことがあった。それは、ブラジルと言われていた観光地、高級リゾート地、フェルナンドジノロンニャに行くことである。

ブラジルは成長と言う面で世界中から注目されている。その国の一番のリゾートに行ってみれば、何が求められ、何が供給されているのか、その国民の生活と成長のレベルを知ることができるからである。さらには、ブラジル以外の国、多くはアメリカ、ヨーロッパの先進国になろうが、そこからの着目度も知ることができる。

フェルナンドジノロンニャはブラジル人の誰もが認める究極の楽園であるらしかったので、サルバドールからこの土地への視察は私にとって必修課題であった。

フェルナンドになんか行かないで、ずっとここに、サルバドールにいればいい、ビザの期限が切れるまでずっとここにいればいいのに・・・ミゲルは絶えず私にこういつていた。

止めるあなた駅に残し・・・ではないけれど、引き止めるミゲルに、一週間したら必ず帰ってくる、来週の朝、このバスターミナルに必ず迎えに来て・・・と言って、私は長距離バスに乗り込んで楽園といわれる秘島、フェルナンドジノロンニャに向かったのであった。

ブラジル北西部・アフロブラジリアン紀行

ユキーナ・富塚・サントス

当時の私には、ここブラジルでやらなければいけないことがあった。それは、ブラジルとされている観光地、高級リゾート地、フェルナンドジノロンニャに行くことである。

ブラジルは成長と言う面で世界中から注目されている。その国の一番のリゾートに行ってみれば、何が求められ、何が供給されているのか、その国民の生活と成長のレベルを知ることができるからである。さらには、ブラジル以外の国、多くはアメリカ、ヨーロッパの先進国になろうが、そこからの着目度も知ることができる。

フェルナンドジノロンニャはブラジル人の誰もが認める究極の楽園であるらしかったので、サルバドールからこの土地への視察は私にとって必修課題であった。

フェルナンドになんか行かないで、ずっとここに、サルバドールにいればいい、ビザの期限が切れるまでずっとここにいればいいのに・・・ミゲルは絶えず私にこういつていた。

止めるあなた駅に残し・・・ではないけれど、引き止めるミゲルに、一週間したら必ず帰ってくる、来週の朝、このバスターミナルに必ず迎えに来て・・・と言って、私は長距離バスに乗り込んで楽園といわれる秘島、フェルナンドジノロンニャに向かったのがあった。

1.5 夜空を見上げて君を思ふ

飛行機に2時間のってたどりついたフェルナンドジノロンニャは秘島というよりも未開の地、のイメージが強かった。沖縄の那覇のイメージではなく、離島のなかで、適度な規模のもの、というところだろうか。何よりもその島が最高級のリゾート地として賞賛されているのは、その安全性によるのだ。

アクセスは日に何本かの飛行機か週に一回のクルーズ船だけである。犯罪は10年前に起こった銀行強盗一軒だけ、貴重品も何もおきっぱなしにしてサーフィンに行けるのは、この島が隔離された観光地であることによる。

ブラジル北西部・アフロブラジリアン紀行

ユキーナ・富塚・サントス

犯罪に対する緊張が取れて、海亀を見たり、イルカを見たり、シュノーケルもできる。けれども私はいつも何か足りない感じがして、心が満ち足りていないような思いを終始いただいていた。

満点の星をみても、海に沈む夕日を見ても、いつも同じことを思っていた。ああ、ここにはミゲルがいない。私のミゲルがここにはいない。青い海も波も、のどかな田園も、何も響かない。海をみて落ち着いた感じを味わったのは、ミゲルとでかけた、あのプラヤ（海岸）だけだ・・・ここには本当にミゲルがいない・・・

フェルナンドで過ごした数日間、私はずっと、この空虚な、うつろな思いを抱えて、自分のすべきことを考えていた。これは、もうダメだと思った。離れてこんなにさびしいのなら、終始一緒にいるしかない。私は、夜空の星を見上げて、ミゲルに再び会える日を指折り数えて待ちわびていた。

2 ドルチェ・ビーダ（甘い生活）

2.1 ペロリーニョにて

さびしかったのはミゲルも同じだった。学校から毎日私にメールを送って、早く帰ってこいと繰り返し言った。サルバドールに帰ってきたら、（ミゲルの）家に泊まれるように両親に話してみると書かれていた。

余談だが、ご両親からは、結婚もしてないのに、そんなことダメだと怒られたらしい。ミゲルが両親の反応を私に語った後、

「（僕の）おとうさん、おかあさんが、何を言っても無駄だよ。だって僕たちは結婚するんだから！」

と口を尖らせて私に言った。

結局はこれがプロポーズの言葉になった。

ブラジル北西部・アフロブラジリアン紀行

ユキーナ・富塚・サントス

私たちは、ペウロリーニョに住むアメリカ人のアパートに居候して、私がブラジルを発つまでの1週間あまりをすごした。

一緒に買い物にでかけ、毎日何かしらの料理を作り、サルバドールとペウロリーニョのスピリットであるアシェー(黒人音楽)を毎日、肌で感じて暮らした。

ドルチェ・ヴィータ(甘い生活)と呼べるほど優雅な日々ではなかったが、私にとってはミゲル無しの生活に比べたら、はるかにまともな、満ち足りた心地よい生活だったのである。

さて、このあと、ミゲルと離れてから、彼を日本によんで、日本での生活をするまで、珍道中ならぬいろいろなハプニングがあるのだが、それは追々ブログの中で話していく。

今回のミゲルの居ない一週間は私には、このお互いの出会いと結婚の決意を思い出させるいい経験になった。ちょっと一人で羽をのぼそう・・・どころではなくて、ああ、そういえば、一人ではいられなくて、これはやばい!と思うことから結婚を意識したのだったなあと、ふつふつと思い出したのである。

2.2 初めてのお留守番

夫にとっても、一人になる時間があったのである。12月の初めのことだが、私がNYに出張で行くので留守にしなければならないときがあった。日本時間にすれば、3日3晩夫を一人で日本に置き去りにしたことになる。

「ダイジョウブ、ダイジョウブ」と夫は私に繰り返し言った。私のNY滞在は、実際は2日に満たないというのに、事細かく買ってきてほしいものリストをこしらえていた。意外に私が居ないほうが、のびのびできていいのかしらん、と思わないでもなかったが、そんなに長い期間でもないのだからと、私の心配も出発前のあわただしさにかき消されてしまった。

滞在二日目の会議とレセプションのほんの合間にオット御指定のスケボー用品ショップに出かけ、そのままパーティ会場に直行して、深夜近くなってホテルに戻った。メッセージランプが点滅している。しまった、会場に直行して、ロビーでの待ち合わせをブッチしてしまったお叱りか?と恐るおそるメッセージダイヤルを押した。

ブラジル北西部・アフロブラジリアン紀行

ユキーナ・富塚・サントス

懸念のおしかり電話は一件もなく、3件のメッセージすべてがオットからであった。

「わたしわあ、とてもおさびしいですねえ・・・」

たどたどしい日本語がかなり私を切なくさせた。

日本にもどってからオットの同僚に話を聞けば、私の留守中のオットはとても悲惨だったらしい。なにをしてもボーっとして心ここにあらず、練習中もうつろで、ちょっとしたことでイラついていたらしい。とにかくいつもの元気がなくて、ナーヴァスになっていたとかいう話であった。

オットは必死で否定していた。私が家に帰ってきたとき、何もかもがピカピカに掃除されていて、家中のあらゆるごったな物が整理整頓されていたので、私が居ない間、ここぞとばかりに、がっと掃除をしてくれたのだと思った。普段、私を待って夕飯を作ってくれる時間も整理整頓についやしてくれたのか、わが夫！と一瞬うれしくなった。

が、しかし、ベッドで眠った形跡がない、干したての布団をそのままかぶせたように、これまたキレイに片付いているのである。

不審に思って私がたずねると、床を指差してミゲルが答えた。

「ここでビデオを見ながら寝た・・・」

同じ経験は私も過去に、何度もあったので気持ちはよくわかった。おそらく私に電話をするつもりで、適当な時間になるまでテレビを見ていようと思ったそうである。うとうとしだして、結局はそのまま床で寝てしまったらしい。

「サビシカッタ」とつぶやくオットを私は抱きしめないではいられなかった。